

第7編  
資料



## 千歳の町名

## 第1項 明治、大正、昭和前期の地名

## 村名と大字名

明治2（1869）年8月、政府は蝦夷地を北海道と改め11国86郡を置く。千歳村、長都村、漁村、島松村、蘭越村、烏柵舞村をもって胆振国千歳郡が編成され、13年3月には千歳村外五ヶ村戸長役場が置かれ千歳開庁となる（M30漁村、島松村離脱→漁村外1ヶ村戸長役場設置）。

千歳、長都、蘭越、烏柵舞の4村は大正4（1915）年4月に合併し2級村制千歳村となる。海軍進出の昭和14（1939）年には1級村制千歳村、17年には千歳町となる。33年に市制を施行し千歳市となった。

次に掲げる4村の名は大正4年までは村名、4年から昭和26年の間は大字名だった。

**千歳村** 千歳とは文化2（1805）年に命名された蝦夷地初の和地名で旧名はアイヌ語のシコツ（大きな・窪地）、高速道路から国道36号の辺りまでと、青葉公園と千歳川左岸支笏火山灰台地に挟まれた一帯を指す。シコツ川に鶴が多く生息していたことから「鶴は千年、亀は万年」の故事から千歳（川）とした。命名は箱館奉行（後・松前奉行）の羽太正養（はぶたまさや）（とらふとや） 扨（とらふとや） 捉（とらふとや） 島紗那事件（文化露寇）における撤退の責めで罷免、逼塞（ひつそく）（自宅謹慎）中に千歳命名を含む蝦夷地関連の記録として『休明光記』を著す。

大正4年からは千歳郡の自治体名となる。昭和8（1933）年に村内を千歳、根志越、中央、嶮淵、近唐、幌加、竜丑内、新嶮淵、阿宇砂里、長都、釜加、蘭越、烏柵舞、ママチの14区に分けた。

**長都村** オサツとは、アイヌ語のオサツナイ（川口・乾く・沢）のナイを省略したもの。江戸期の「ヲサツ」、「カマカ（釜加）」。カナ盤とは固い

粘土層をいい、その上（カ）にあることからカナカ↓カマカに変化したという。

「おさつ」は元禄13（1700）年に松前藩が幕府に上呈した『松前島郷帳』の中に名がみられる。カマカは明治中期、盤上村と呼ばれたという。「長都」表記の初出は明治6年の『地誌提要胆振国』といわれる。もと長都村の一部に都がある。明治42年頃に入植した人々が都のような土地にしようと願って通称された。

上長都ももと長都の一部である。明治期には長都川上流部から長都川上、大正期に上長都と呼ばれるようになった。

村域は現在の長都、上長都、釜加、都、北信濃、桜木、長都駅前、北陽、勇舞、みどり台北、みどり台南である（区域が2村にまたがる場合は面積の大なるものを記載した）。

**蘭越村** アイヌ語のランコシ（カツラの木・の群生する・所）が由来。江戸期は「ランコウシ」といった。ほかに、「アツイシ（アツテウシ）オヒヨウの皮・多くある・所」、「マス（ハマナスの実・群生する・所）」、「ルウエン（路・悪い）」のkotanがあったという。明治6年に蘭越村と漢字表記になった。

村域は現在の蘭越、桂木、新星となる。

**烏柵舞村** 原名はアイヌ語のヲサクマコマナイ（尻・無しの後ろ・にある・沢）。江戸期のkotan「ユウナイ（それ（ヘビ）の・いる・沢）」、「ルウエン」、「フェラフ（ポロフィラ）大きな・激端」、「ヲサクモマイ」からなるという。明治6年、烏柵舞村と漢字表記になった。

烏柵舞は昭和26年6月1日までふ化場以西から美笛にいたる広大な区域で、現在の紋別、藤の沢、西森、水明郷、幌美内、奥潭、美笛、モラップ、支寒内、支笏湖温泉、（支笏湖）であった。

なお、本稿において命名年月日記載なき町名は、『千歳市例規類集』の字名一改正沿革による26年6月1日施行となっている。

註 町名解にあたって、アイヌ語地名の和訳は長見義三の『ちとせ地名散歩』によった。また、多くの町名に付与の経緯・記録がなく由来に諸説がある。

### 昭和8年の14区名

昭和8（1933）年、千歳村区設置規程が制定され議会の議決による区名が制定された（長都、釜加、蘭越は既述）。

**千歳** 当初の千歳区は字ママチを除く千歳村大字千歳村字千歳村の一部。昭和15年9月30日提出「千歳村区設置規程中改正ノ件」によると改正前の千歳区は字千歳村と字ママチから成っていたものを、第1〜3区に分割するものだった。このことからママチ区は8年以降15年までの間に千歳区に吸収されたものと考えられる。

第1区はママチを含む千歳川右岸区域。第2区は北海道鉄道鉄橋上流の千歳川左岸区域、第3区は鉄橋下流の千歳川左岸区域。第1区は川南、第2区は川北、第3区は末広と通称された。

**根志越** アイヌ語のネシコシ（クルミの木・の群生する・所）が由来。

本来のネシコシは根志越橋の兩岸周辺一帯といわれている。昭和初期にはクルミの木が多くあった。「くるみ」は幼稚園や温泉などの名として親しまれている。

**中央** 旧名はアイヌ語のオルイカ（川口・橋）、キウス（萱・の群生する・所／木白）。国指定史跡キウス周堤墓群がある。

命名の由来は、今は干拓されて見ることができない長都沼の東岸地帯の中央の意味であり、千歳の中央ということではない（S32チフニ（自身を上げてゐる・ものⅡ（高く）上がっているもの）全部が中央に編入『市史』）。  
**嶮淵** アイヌ語のケヌフチ（ハンノキ・群生するもの（沢）の口）が

由来。

昭和17年と24年の改正においても嶮淵とされたというが、上川管内にも同じ名の村があり郵便誤送達が多かったことから改正した。地区には松原温泉、信田温泉があったことから温泉の郷泉郷に変更した。

**近唐** アイヌ語のコムカラ（嶮淵川）ぐつと曲がる（所）が由来。

昭和26年の改正で協和となる。命名由来についてはわからない。協和とは和名で「心をあわせて仲よくすること」の意。力を合わせて近唐を開拓することを願ったの命名だったのか。

**幌加** 原名はアイヌ語のホロカケヌフチ（後戻りする・嶮淵川）。

ホロカケヌフチ川を略しホロカ・ホロカ太とし漢字を当てた。

**竜丑内** アイヌ語のタツウシナイ（樺皮・の多い・沢）が由来。

昭和26年の改正で新川とされた。新川は立山連峰に源を發し、富山県中新川郡を流れ富山湾に注ぐ新川に由来するという。竜丑内には富山県出身者が多く、故郷を偲んでの命名である。現在、富山の新川は常願寺川と呼ばれている。

**樺皮**は灯燭の燃料、細く裁断した樺皮を編んで手提げになる。

**新嶮淵** アイヌ語のシーケヌフチ（本流である・嶮淵川）が由来。

昭和26年の改正時に、千歳地域の最東端に位置し東側の由仁川端、西方向の幌加から見ても丘陵地帯となることから東丘と名づけられた。

**アウサリ** アイヌ語のアウサリ（ホカンカニ、アウサリ両河川）内の葭原川股の中にある葭原が由来。

戦前に犬上牧場があったアウサリが、昭和26年に駒里と改正された。アウサリ↓牧場↓馬↓駒が放牧されていた郷↓駒里が命名の経過と思われる。

**駒里**と呼ぶ人が多い。「大字名廃止並びに字名改正要領」（後述）におい

ても（こまのさと）と読み仮名を付している。

**美笛↓千歳鉦山** アイヌ語のピプイ（小石原・だらけの・もの（川））が由来とされるが確証を現場に示せない。アイヌ文化に詳しい田村俊之は「ピッ・ピナイ（石の多い・谷川）↓ピップイ」と解した。

昭和8年に金鉦の露頭が発見され、12年に本格操業となる。8年に烏柵舞全域が区となっていたが、人口急増によって14年にシシャモナイ沢以西が美笛区となる。15年になると川口から6<sup>キロ</sup>地点の六千<sup>キロ</sup>鉦山地区東端で東西に分け、西を千歳鉦山第1区、東を第2区とした。

26年に字名を美笛とした。人口が多かったことから千歳鉦業所が名付けた草笛（総合事務所、職員住宅）、鳴尾、舞園、旭ヶ丘などの街区、元山、福神沢という抗口地名が挙げられる。

**ママチ** アイヌ語のママチ（泉池・だらけの・もの（川・沢））が由来。ママチ山林（泉沢）、ママチ原野（千歳飛行場）、青葉公園中央広場以西から水明郷・藤の沢境界までなどママチ川流域の広大な地域を指す。

昭和26年の改正時、南長沼用水路と千歳川に挟まれたママチの一部に漢字を当て真町ができた。その後、42年9月23日に末広町の一部が末広新町東・中・西・高台となって新たな町名が生まれたが、音が同じで混乱することから真町は青葉公園を除いて54年7月23日に住居表示を実施、旧名を漢字化し真々地とした。

26年の改正時、真町とされた以外のママチは泉沢となった。泉沢とはママチの和訳からの命名である。ママチ川支流に泉川がある。

### 昭和17年の字名改正（第一土地区画整理事業）

昭和12（1937）年、海軍基地に決定した千歳村は区画整理の必要性を考え、翌年2月に都市計画法の指定申請をなし10月に内務省から指定された。開戦翌年の17年4月9日に千歳第一土地区画整理組合の設立認可を

申請、7月2日に認可があり完成をみたのは24年6月10日であった。

次に掲げるもの以外の小字は、区名、村名を細分化したと思われる。

町名が付与された旧市街地ともいうべき10の町名にのみ現在「町」がつく。命名の由来は残されていない。簡明で口調がよく全国・全道各地に同名があるが地区の特色を表し妙を得ている。17年5月1日命名。32年9月までは字である。

**本町** 「本」とは「もとからあるもの」「中心となるもの」の意で、江戸期に会所があった千歳の中心、明治になってからは室蘭街道（札幌本道）沿いに市街が形成されていったことが命名の理由か。昭和24年までに1〜4丁目、32年に5丁目ができた。

**東雲町** 東雲とは「篠の目」＝篠竹で網代様に組まれた明り取りが転じて「東の空がわずかに明るくなる頃」、「あかつき」、「あけぼの」の意。区画整理区域の東側にふさわしい。1〜5丁目がある。戦中、現・市庁舎が建つあたりは東雲町が定着せず川南第5と呼ばれていた。

**朝日町** 区画整理区域の東端、朝日が昇る方角に当たる。昭和24年までに1〜7丁目、32年にママチ川東側の朝日町1206番地もとの水田地帯にリトル・アメリカ（米兵用貸家）ができ8丁目が成立する。

**清水町** 南の町境に清流千歳川がゆったりと流れる。昭和24年までに1〜6丁目、59年10月22日に7丁目ができた。7丁目の成立は、54年に完成した国鉄千歳線高架鉄道橋梁の完成による旧線路敷の編入のためであった。千代田町、栄町の7丁目も同じ理由である。

**幸町** 1〜6丁目がある。この町に幸あれという願望を表しているのか。苦小牧、江別、恵庭のほか各地に同名が多い。

**千代田町** 昭和24年までに1〜6丁目、59年10月22日に7丁目ができた。千代田とは普通は水田のある地域の名であり、この地も明治期から昭和初

期までは田圃で用水路が2本、千歳川に注いでいた。

稲作の歴史を残しつつ、豊かさが長く続くことを願っての命名であろう。  
**栄町** さかえちやう 戦時中は海軍航空廠工員宿舎があった。昭和24年までに1〜6丁目、59年10月22日に7丁目ができた。この町が末永く栄えてもらいたいという願望からの命名だろう。

**錦町** にしきちやう 1〜4丁目がある。室蘭街道に面し戦前から住宅・店舗が連なり、本町から続く市街地を形成していたことによるのだろう。

**春日町** かすがちやう 1〜5丁目がある。町が春の日を浴びた若芽のようにすくすくと伸びゆくことを願っての命名か。

**緑町** みどりちやう 1〜5丁目がある。北側の支笏火山灰台地の豊かな緑からの命名か。火山灰台地の丘陵は戦後、緑ヶ丘と呼ばれていた。

### 昭和24年の町字名施行

『千歳市例規集』の市制・字名にある「昭和24年5月7日施行」とは、昭和24（1949）年6月10日の第一区画整理事業の完成を前に町議会で市街地10町とともに千歳全域の字名（26年と32年の「改正により廃される字名」など）を新たに議決した日であろう。

終戦直後の字名の実状では郵便物の配達などに困難をきたし、前述の区名、字名に東部など（長都西部、嶮淵中央…）のほか、第一、第二など（川北第三、根志越第四…）を付し細分化していた。ほかに、後に町名となる通称の氾濫（湖畔、末広、日の出丘、青葉丘、真町、真々地、祝梅、勇舞…）、長野隊、静和といった開拓団体名などを入植地の地名扱いにしたほか、鉄道官舎、烏柵舞第一発電所など目印となる建築物を地名化していた。また、アイヌ語地名もカタカナ表記と漢字表記が混在していた。

### 昭和26年の命名

昭和26（1951）年5月1日、地方自治法第260条第1項の規定に

よる大字名廃止と字名改正が4月30日付『北海道公報』に掲載された。

「廃止する大字名」として旧村名4（千歳、長都、蘭越、烏柵舞）、「改正字名称」34、「改正により廃される字名」17、また「存置される字名」として先述の市街地10町と蘭越が記されている。

「改正により廃される字名」 アウサリ、ネシコシ、シユクバイ、ケヌフチ、ホカンカニ、コムカラ、ホロカ、ホロカ太、ホロカケヌフチ、ターツウシナイ、シーケヌフチ、マ、チ、マ、チ太、オリイカ、キウス（以上大字千歳村）、カマカ（大字長都村）、トベトマイ（大字蘭越村（二つの・川・のある・所）林東公園）

「大字名廃止並びに字名改正要領」に「字名中その呼称は所謂当字的なものが殆んどであって完全にこれを呼称するものが少ない状況にある」とされた。

「改正字名称」34のうち長都、釜加、都、上長都、根志越、中央、泉郷、協和、幌加、新川、東丘、駒里、真町、泉沢、蘭越、美笛については既述した。末広町は後述する。

**大和町** やまとちやう 昭和26年から53年までの町名。52年、一部を桂木に割譲する。53年7月17日に住居表示を実施、「町」を省き**大和** やまと となり1〜4丁目が成立した。大和とは日本の古称にして旧国名であるが、町名の場合は住民が大いに和する意味となる。

**青葉丘** あおばおか 南長沼用水路付近にある2万2000年以上も前の古砂丘と考えられる丘陵に向かって緩やかな上りとなっている地形からの命名だろう。

昭和46年11月18日に青葉丘、日の出丘の一部から**青葉** あおば 1〜5丁目が成立する。1〜7丁目は58年2月7日に、11月21日にも住居表示を行い8丁目まで延伸。千歳川と師団通り（市道東大通）に挟まれた平地にあることから青葉丘の「丘」をとった命名となる。

**日の出丘** ひのでおか 昭和40年前後に開発許可を得ないで団地が造成された。市街化調整区域にあったが、43年に団地内道路が市道認定され、52年にみなし区域となった。46年以降、一部が青葉、住吉となる。

日の出丘団地は古砂丘の上に立つ。日の出丘の町名は市街地の南東に日の出方向に位置する丘陵からの命名。

60年11月25日に住居表示を行い、日の出丘、根志越の一部から**日の出**が成立する。1〜5丁目がある。師団通りを挟む平地であることから日の出丘から「丘」を省いた命名、千歳開拓実験農場祝梅スイカ発祥の地。

**柏台** かしわだい カシワの多い台地だったことによる。

平成11（1999）年4月6日、JR千歳線南千歳駅南口のオフィス・アルカディア地区が**柏台南**1〜2丁目となる。

**美々** みび アイヌ語のペペ（水たまりの群在する所）、ペツペツ（川の群在する所）が由来。

河川交通路シコツ越えの中継地として江戸期から知られる。官営鹿肉罐詰製造所ができた明治11（1878）年頃に美々という漢字が与えられた。

**平和** へいわ 戦前の海軍航空基地敷とほぼ同じ区域。戦後、連合国軍米軍が進駐していた。占領米軍との共存共栄を求める町当局が、混乱、混沌の反対語の平和ではなく、米軍が冷戦下における日本の秩序に平和を守る盾であるということからの命名と思われる。

**祝梅** しゅくばい アイヌ語のシユクパイ（成長した・イラクサ）が由来。

江戸期からある広大な区域の地名。祝梅の漢字を当てたのは天理教祝梅宣教所（M44開設／現・分教会）であった。天理教の紋が梅鉢であることから、シユク（祝めでたい・祝詞）パイ（梅に天理教）に祝梅とした。

**北信濃** きたしなの 終戦時に長野県から緊急開拓団が入植した。入植者は長野県の旧国名である信濃を偲び、遠く北にあることから北信濃とする。

旧市街地北部の支笏火山灰台地の大部分が含まれ、のちに北栄町に北栄・新富、信濃、富士、富丘、自由ヶ丘、北斗、桜木、北光、北陽、長都駅前、あずさ、勇舞が成立する。第1工業団地は大部分がもと長都村。

**藤の沢** ふじのさわ もと烏柵舞村の一部。

王子製紙苦小牧工場専用鉄道（山線）第二発電所駅周辺の地名、駅名は後に牛の沢（造材関係者俗称・牛の沢）と改称された。牛の沢の烏柵舞林道と旧・支笏湖街道（沿街道）の交点には恵庭営林署の廠舎と山三富士屋商店の造材工場があった。地名の由来はふじやと牛の沢の融合からきていると思われる。『増補』を編さんした長見義三は昭和26年以前の通称は「富士の沢」と考えられるとしている。

**水明郷** すいめいきょう もと烏柵舞村の一部。

水明郷は王子製紙苦小牧工場に送電する千歳川水力発電所が5カ所ある地域の字名。水明とは、ダムに湛水された澄んだ水が太陽や月で美しくはつきり見える様をいう。水明の郷が命名の由来。第一発電所には山線の水溜駅があった。

**西森** にしもり もと烏柵舞村の一部。

市街地の西にある森林地帯の意。当初案では西森のほかに「東森」もあった（「大字名廃止並びに字名改正要領」）。

**紋別** もんべつ アイヌ語のモベツ（子である・川（千歳川の支流））が由来。もと烏柵舞村の一部。

当初の案では東紋別、西紋別に分かれていたが、恵庭営林署の担当区が紋別ということから東西に分けなかった（『市史』）。

**幌美内** ほろみない アイヌ語のポロピナイ（大きな・枯沢）が由来。もと烏柵舞村の一部。

水蒸気を噴く恵庭岳頂上付近の火口から東方に延びる深い亀裂がポロピ

ナイ沢で支笏湖に達する。大正期の丸駒温泉への郵便物の宛先は、北海道胆振国勇払郡苦小牧王子山線支笏湖丸駒温泉とややこしいものだった。

**奥潭** おくたん アイヌ語のオコタヌンペ（川口に・村・のある・もの）が由来。もと烏柵舞村の一部。

昭和35年から57年までの間、恵庭岳山麓にオコタン温泉があり、客船が着陸していた。恵庭岳は山頂部、溶岩流の堰によってできたオコタンペ湖を含んで湖側斜面は千歳管内となる。札幌冬季オリンピックピック滑降競技の会場だった。

**モラップ** アイヌ語のモラップ（小さな・低い・もの（山））による。もと烏柵舞村の一部。通常、モラップと称されることが多い。

キムンモラップ（478メートル）とピスンモラップ（506・4メートル）が並ぶ。キムンは山手、ピスンは浜手・苦小牧側で支笏湖出現前からある。

**湖畔** こはん アイヌ語のトウヤ（湖・岸）に由来。もと烏柵舞村の一部。

千歳川呑口に架かるペツパロ（川・口）橋左岸のトウヤである支笏湖岸字シリセツナイ（鳥の・巢・（のある・）沢）を、王子製紙は明治41（1908）年に湖畔と和訳し山線の駅名とした。一方、虻田（H18）洞爺湖町）では洞爺と漢字を当て「どうや」とも発音する。

美しく響きの良い湖畔に通年観光を目指し温泉を掘削（S50）、61年4月20日に観光地名の**支笏湖温泉**と改名した。身近な支笏湖は面積で国内8位、水深と貯水量は国内2位の巨大な不凍湖で全域が千歳管内となる。

**支寒内** しざむない アイヌ語のシサムナイ（和人・沢）が由来。もと烏柵舞村の一部。西からシシャモナイ沢、苔の洞門の沢、落畑の沢がある。

## 第2項 昭和後期以降の地名

### 昭和32年の一部字名の廃止

昭和17（1942）年、26年と字名の改正が行われ、旧市街地と郊外、農村部の現在に続く町字名が整備された。また、26年の改正で廃止漏れとなった字名が、32年10月1日の改正によって最終的な整理がなされた。

「改正により廃される字名」西越、子シコシ、宿梅、シクバイ、メムセ、ネシコシ内シクバイ、マ、チシクバイ、ケヌフチ沢、ホロナイ、木白、コムカラ太、ボンコムカラ、タツウシナイ、龍丑内、青去、パンケベツ（川下の枝川）・パンケベツ、ランコシ、苗太（ナイプツ（沢・の口）、ナイ、ペサ（湿地内にあつて夏になるとクマやシカがそこに入つてのたうちまわる場所、狩人はそこに入つて仕掛け弓をかける・知里地名辞典）、ベシヤ、ビシヤ、マース、ルイン、上千歳、千歳村

字名の廃止のほか区域の変更があり、本町5丁目と朝日町8丁目が新たに設定された。末広町、青葉丘、日の出丘、根志越、祝梅、中央、泉郷、協和、幌加、新川、駒里、東丘、柏台、平和、美々、真町、大和町、蘭越、北栄町、北信濃においては区域の変更によって隣接字との間に編入、割譲が行われた。

### 第2次土地画整理事業（末広地区）

米軍の駐留で飛躍的に発展した千歳は、さらなる都市形態の整備が必要とされ国鉄線以東の水田地帯である末広地区を昭和28（1953）年に土地画整理事業の施行地区として指定、末広第一と第二に分け事業を進めた。第一は33年2月に北海道知事から認可を受け35年度に完成、第二は39年4月に認可を受け42年度に完了をみた。第三は53年8月に認可を受け59年度に完了となる。

**末広町** すまひろちょう 千歳市街を貫流する千歳川の北にある。北西に連なる支笏火山

灰台地の小高い丘のふもとの水田地帯が扇子を広げた形に似ていることから末広と名付けられた。末広には「だんだん栄えること」の意がある。昭和26年から59年の町名で32年に根志越の一部を編入している。千歳線―千歳川―南29号―東11線に囲まれた区域となる。

35年、一部が末広町東区、末広町中区、末広町西区となった。さらに、42年には末広町各区の外縁に末広新町東・中・西・高台が成立した。末広新町地区は日の出大通の東側と末広高台通（東11線）北側にあたる。55年には第3末広として稲穂が成立、併せて町名の整理を行った。

**末広町東区** 昭和35年に1～4丁目ができ、42年に1～3丁目になり4丁目では末広新町東1～2丁目が成立。55年11月4日に末広1～3丁目となった。

**末広町中区** 昭和35年に1～3丁目ができ、55年に末広4～6丁目となった。

**末広町西区** 昭和35年に1～3丁目ができ、55年に1丁目のみとなり2、3丁目では末広7～8丁目となった。59年、鉄道高架による1丁目割譲で町名が消滅する。

**末広新町東** 昭和42年から55年の町名。1～2丁目。2丁目には現在より少し下流に捕魚車（インディアン水車）があり、そばに西越採卵場（現・千歳川捕獲場）が明治30年から平成5年（1993）まであった。西越は、ネシコシ（ニシコウシ）が「根志越」の漢字を当てられる以前の漢字表記。26年以前、周辺両岸は根志越の一部。花園1～7丁目になる。

**末広新町中** 昭和42年から55年の町名。1～3丁目があった。花園3～5丁目になる。

**末広新町西** 昭和42年から55年の町名。1～4丁目があった。花園6～7丁目、高台3～4丁目になる。

**末広新町高台** 昭和42年から59年の町名。当初1～4丁目があった。支笏火山灰台地にあることから末広新町高台とした。55年に高台が成立したが、鉄道高架敷の1丁目のみが残り59年をもって廃止された。

**稲穂** 末広地区の入植は明治17（1884）年の山口県人といわれる。27年には稲作のため水利権を取得、サケの遡上母川だったため蘭越に水門を設けて取水し根志越用水と呼んだ。昭和に入り都市化のため用水路を根志越北街道の中央に移設、掘削した土で整備した道が用水通りと呼ばれた。末広町一帯は戦前から米処として栄え、稲の穂の重く垂れ下がる稔りにたとえ稲穂と命名された。

昭和55年4月27日の命名で1～4丁目があるが、当初の住居表示は1、4丁目。2、3丁目の住居表示は61年11月7日。

**末広** 昭和55年11月4日の命名、住居表示を実施（高台、花園も同日付）。1～8丁目がある。

もとの末広町東・中・西区からなる。末広を冠する7つの類似町名から郵便配達困難区域といわれたこともあったが、町名を整理するにあたり新たなものではなく、末広の由来となった地形が区域の大部分を占めることから旧町名に復した。

**高台** もとの末広新町高台1～4丁目、末広新町西2、4丁目、昭和55年11月4日に高台1～6丁目になる。高台の名を冠した小学校が45年に北信濃（のち富丘）に開校しているが、末広新町高台という町名からではなく支笏火山灰台地＝高台に由来している。

**花園** 昭和55年11月4日の命名で1～7丁目がある。もとの末広新町東・中・西の一部。花々を育て、潤いのある生活しやすい町を作っていくことを願っての命名か。

## 北信濃地区の開発

陸空自衛隊の来駐、千歳飛行場における民間航空の伸長、米軍撤退による雇用先確保から造成が始まった工場団地への大手企業の立地・操業によって人口は順調に伸び、市街地北部の支笏火山灰台地に住宅地が急速に拡がっていった。地続きのもと上長都に桜木とみどり台北、みどり台南がある。

支笏火山灰台地が栄町と接する付近は、昭和20年代中頃から希望ヶ丘と呼ばれた。千歳高等学校の生徒が名付けたといわれる。

**北栄町** ほくえいちやう 北信濃の共同墓地横に北栄小学校が開校したのは昭和28(1953)年のこと、南32号と東11線交点周辺は静和第1と通称されていた。

校名の由来は学校にも記録がないという。栄町の北に位置することから校名であろう。30年9月、自衛隊官舎が建ち並ぶこの地に町名を付するにあたり区域内の小学校の名から北栄町と命名した。

**北栄** ほくえい 昭和44年10月6日に住居表示を実施、北栄町の一部から成立した。1〜2丁目がある。命名由来は北栄小学校があること、住居表示審議会発足当初から「町」を省く方針だったことによる。

住居表示は北栄、新富、信濃、富士が同時。4町成立で鉄南の北信濃は大部分が第1、第2(一部)工業団地だけとなったが、市は通産省工場適地の地区名である「北信濃」を存続させることとした。

**新富** しんとみ 昭和44年10月6日に北栄町と北信濃の一部から成立した。新たに成立したゆたかな区域ということからの命名か。1〜3丁目がある。

『住居表示綴』には命名由来の記載はないが「5町内会から35の案が出され、新富、有明の2案が残った」とある。

**信濃** しなの 昭和44年10月6日成立。1〜4丁目がある。北信濃の一部から成つ

たが、前年開校の信濃小学校があったこと、開拓者の信州への思いから新たな町名を欲しなかったということだろうか。

信濃小周辺は、規模の大きな凹地でポロコツ(大きな・谷)と呼ばれていた。現在は埋め立てられているため判然としないが、北斗中学校西の北部隊内凹地から想像は容易である。谷の下が江戸期の長都街道の休憩地トテム(2つの・泉池/現・防災の森―河川災害訓練広場)、トテム川(原名ツテムナイ=2つの・泉池・川)となる。

**富士** ふじ 昭和44年10月6日成立。1〜4丁目がある。町名は町内会役員会で決定された。

長野にちなんだ北信濃が住居表示でなくなることから、長野県南佐久郡南相木村出身だった中島千勝が命名したという。長野県各地から富士山を見ることができ、また、南相木から至近の小海線小海駅から中央本線に向かうと富士山が見えてくる。故郷の景色を偲んでの命名と思われる。

**富丘** とみおか 富丘の名は市が昭和40〜43年度にかけ造成分譲した北信濃富丘団地が初出となっている。東11線以北初の宅地造成で市の期待するところも大きいものがあり、台地にあるゆたかな町であれとの願望が込められているのか。当初は南30号までが町域であった。

48年2月1日に住居表示を実施し富丘と命名、1〜4丁目が成立した。**自由ヶ丘** じゆうがおか 昭和40年、25戸からなる自由ヶ丘団地内会が発足した。住民が新天地のマイホームでのびのびと生活する意か。

46年5月、測量設計事務所による住宅造成事業法認可団地の第1号として自由ヶ丘第1団地が造成された。53年11月1日、住居表示を北斗、桜木とともに実施し町名を自由ヶ丘とする。1〜7丁目がある。

**北斗** ほくと 緑町の北側に当たる支笏火山灰台地は緑ヶ丘と呼ばれ、敗戦直後から公営の引揚者住宅が建設された。昭和53年11月1日に住居表示を行い

成立、当初は1〜4丁目だった。北部隊スキー場から続くポロコツ（幅200<sup>メートル</sup>、深さ10<sup>メートル</sup>、延長1<sup>キロ</sup>）を埋め立て58年6月20日に5丁目、8月30日に6丁目<sup>が</sup>延伸した。

北斗命名の由来を佐野富士男は「千歳の天文同好会に入っていた息子の影響により、千歳の夜空の美しさを改めて知り、是非この新しい町に星の名をつけたく提案した」という（千歳市町連協20周年記念誌『まちづく<sup>り</sup>』）。

**桜木** さくらぎ もと上長都であるが、北信濃と地続きであり宅地造成と住居表示が自由ヶ丘と一緒にであったことからここで解説する。

昭和46年5月、民間資本による住宅造成事業法認可団地の自由ヶ丘第2団地として造成分譲された地区である。

53年11月1日に住居表示を行い1〜5丁目<sup>が</sup>成立した。青葉などの航空機激甚騒音地区の集団移転先地である。

桜木、自由ヶ丘という町名が成立する半年ほど前の53年4月1日、北信濃に桜木小学校が新設された。桜木小資料によると「昔、エゾヤマザクラが風雪に耐え美しく咲いていた。（略）再び美しくたくましい桜に囲まれた学校をつくり」と校名の由来がある。

桜木小学校敷は住居表示審議中に自由ヶ丘7丁目となるが、町名を考えるにあたって桜木小が地域のランドマークであり、町内会として最も希望が多いことから桜木とした。

**北光** ほっこう 昭和46年5月、民間資本による住宅造成事業法認可団地の第3号としてひばりヶ丘住宅団地が造成されたのが始まりで（現・3〜4丁目）、ひばりが天高く舞うことからの命名（ひばりヶ丘町内会創立25周年記念誌『あゆみ』）。緊急食糧増産の開拓地を彷彿とさせるものがある。

40年代末にひばりヶ丘隣接地に静和団地が造成された（現・1丁目）。

静和とは静かで和やかな町にしようとの思いが込められた。

62年12月7日に住居表示を行い北光となる。1〜7丁目<sup>が</sup>成立した。千歳の北に光り輝く町との意味が込められた。審議会では2団地町内会が自らの団地名を町名に推したが、ともに町名の案として北光があったことからまとまった。

**長都駅前** おさつえきまえ 長都駅前東6線北側の住宅地開発は早くから行われていた。

昭和47年には長都産労者住宅団地、50年に長都駅前団地、51年にパークタウンおさつ、52年にグリーンタウンおさつ、59年にサニータウンが造成分譲されていた（開発時＝上長都／現・3〜4丁目）。

63年、おさつ駅前地区土地画整理事業が認可され、おさつニュータウンの造成分譲が開始された。平成4（1992）年、住居表示審議会は東6線北側の先行開発とおさつ駅前地区を合わせると区域の規模が大きいことから東7線・勇舞川で2町に分け、10月24日に住居表示を実施した。東7線以北を長都駅前1〜4丁目、以南を北陽とした。

住居表示審議会の答申書に命名の由来がある。

長都という名称は歴史的に、明治の初めから長都村と言う名称で事実上現れて来ている。／昭和17年の字名改正、昭和26年の大字の廃止等を経ても、なお、現在まで長都の名は町名としてその名を歴史に止め、JR長都駅、長都駅前郵便局として地名、建物、建造物等にもその名が冠され、地域住民に親しまれ定着して来ている。／此の度の町名変更の区域がまさに長都駅前であることから、長都駅前と命名する。

「長都」を盛り込みたい開拓者の執着が強く働き、次を付記した。

長都、上長都の類似町名で苦慮したが東・西・南・北などとは意味合いが違い特異な例である。今後は極力、類似町名を避けることが制度の趣旨である。

平成25年、おさつ駅みどり台地区の住居表示によって一部を編入、5丁目  
目が成立している。

**北陽** 昭和48（1973）年4月10日、北海道千歳北陽高等学校が開校  
した。当初は中央の木造仮校舎で授業、北信濃の農地に校舎を新築し移っ  
てきたのは50年の年の瀬27日のことだった。校名由来は次のとおり。

千歳市の北に位置し、太陽のように力強く光り輝き、明るくたくましく永  
遠に伸びゆく学校を象徴した（学校HP）。

平成4（1992）年10月24日に住居表示を実施、地区のランドマーク  
千歳北陽高校と明るい希望に満ちた町の未来に願いを込め北陽と命名され  
た。当初は1〜4丁目、27年5月16日に北陽高校前土地区画整理事業に  
よって5〜8丁目目が成立した。

**あずさ** 平成8年2月17日に住居表示を行った北信濃第二土地区画整理  
事業で、北信濃、信濃とともに長野県由来の町名あずさ1〜3丁目目が成立  
した。あずさは松本市の近くを流れる信濃川水系犀川さいがわの上流部別称である  
梓川あずさがわにちなむ。梓が当用漢字にないためひらがなとした。

あずさ5丁目は13年1月23日に1〜9番、24年9月15日に10〜25番が住  
居表示をもって成立した。あずさには4丁目がない。隣接の農用地が将来  
宅地造成されることを見込んでの処置なのだろうか。なお、富丘中学校は  
富丘ではなく北信濃、現・あずさ1丁目に建てられた。

**勇舞** アイヌ語のイヨマイ（かくし所）が由来。

勇舞土地区画整理事業によって造成分譲された。施工認可は平成10年9  
月、住居表示は17年10月8日で勇舞と命名された。住民アンケートの結果、  
土地区画整理組合の名、地域を流れる川の名から勇舞とされた。1〜8丁  
目がある。

イヨマイについて、長見義三は『ちとせ地名散歩』に「古老の話による

と、沢の途中の沼の形が陰部に似ているのでそう呼ばれたと伝えられてい  
る」と記した。アイヌの古い考えによると川は女性であるという。

**みどり台北、みどり台南** もと長都、上長都であるが、長都駅前に隣接  
し支笏火山灰台地にあることからここで解説する。

おさつ駅みどり台地区として土地区画整理事業が実施された。平成12年  
8月に施行認可、13年8月に着工し翌年3月から分譲が開始された。

町名を付するにあたり、長都駅前に隣接していたゴセン（5線）川以南  
を割譲し5丁目とし、ゴセン川以北を長都川で北と南に二分した。みどり  
台の名は土地区画整理組合の名から採った。アンケートでは、「みどり台」  
希望が4分の3と多数を占めた。命名と住居表示は25年2月9日、北は1  
〜5丁目、南は1〜4丁目目が成立。地域の地形はゴセン川、長都川の浸食  
による起伏があるが「台」にはなっていない。

#### 祝梅、根志越地区の開発

祝梅、根志越はもと大字千歳村の一部である。市街地の拡大に伴い祝梅  
地区、根志越地区はともに昭和40年代から市街地開発事業が始まっている。  
開発の年代順に解説していきたい。「もと祝梅の一部」の大部分は祝梅ス  
イカで知られる千歳開拓実験農場（町開拓生産農協）の跡地となる。

**東郊、住吉** もと根志越、日の出丘、青葉の一部

東郊土地区画整理組合が昭和42（1967）年度から50年度にかけ施行  
した。当時、街路日の出大通以東は市街地東部のはずれ、郊外であったこ  
とから東郊地区と組合名を付けたと思われる。町名は市街地側から住吉、  
東郊として46年11月18日に命名された。住吉の高台も古砂丘である。東郊  
は組合名、市街地東のはずれから、住吉は住んで良かった住みやすい町を  
つくっていこうが由来か。東郊は1〜2丁目、住吉は1〜5丁目目が成立、  
59年11月26日に住居表示を実施した。

梅ヶ丘、弥生、寿 もと祝梅の一部

この地の宅地化は昭和39年頃から始まり、市が師団通りの北側において49年度から56年度に祝梅土地区画整理事業として施工した。

町名は56年10月10日に命名され、梅ヶ丘1〜3丁目、弥生1〜3丁目、寿1〜3丁目<sup>が</sup>成立、同日付で住居表示も実施となった。

梅ヶ丘、弥生、寿はともに住み慣れた祝梅に対する愛着から、祝梅を意識しての命名と思われる。梅ヶ丘は地形と祝梅の「梅」から、弥生は陰暦3月の異称であり「梅」の花が開くことを祝う早春のさわやかさと町の若々しさを表している。また、寿は「祝」と同義でめでたいことを表すとともに住む人が長命であることを願うての命名か。3つの町名で「弥生に丘で梅を言祝ぐ(寿ぐ)」とめでたい。

豊里 もと根志越の一部

豊里命名の由来は、5丁目の豊里くるみ公園にある根志越土地区画整理事業完成記念碑「豊栄郷」に詳しい。根志越に相応しい公園名である。

(略) 明治27年ママチ川に水源を求め開田を奨励し黄金波打つ豊かな里になつてここに一世紀を迎える。(略) 昭和46年に市街化区域の予定地区(略)

昭和53年6月に市街化区域に編入(略) 土地区画整理事業と住居表示を実施し、新たにこの地を豊里と命名し昭和59年10月に完成したものである

豊里命名と住居表示は昭和58年10月18日、1〜5丁目がある。

旭ヶ丘 もと祝梅の一部

旭ヶ丘は古砂丘にある。昭和61年10月13日に1〜4丁目<sup>が</sup>成立、住居表示も実施した。

『住居表示綴』には、多くの町内会が祝梅に対する強い愛着から「南祝梅」を希望したが、将来的に東西南北となって混乱を招きかねないと第2希望の旭ヶ丘に決まったとある。命名の由来については記載がない。

町名の由来は日の出丘、日の出に隣接していることから、日の出⇨朝日⇨旭と古砂丘の組み合わせか。

流通 もと祝梅、日の出、青葉丘の一部

市は新千歳空港周辺地域における運輸・保管・流通加工の受け皿として流通業務団地を計画、事業主体は市土地開発公社とした。平成6(1994)年9月に造成に着手、7年8月に1丁目地区が完成した。1丁目完成に先立つ6月20日に団地名から町名を流通と命名、1〜3丁目<sup>が</sup>成立した。なお、流通業務団地は一部が旭ヶ丘にも食い込んでいる。

1丁目と2丁目・日の出丘の境界は、もと海軍第二基地専用線であり、並行して旧・道道早来千歳線(S32〜43)が走っていた。

幸福・清流 もと根志越の一部

昭和38年頃から根志越橋北の一部が宅地化され、茶屋団地(関団地)現・幸福1丁目、根志越第二団地(現・清流3丁目)となる。

平成3(1991)年から11年にかけて根志越第二地区、8年から13年にかけて根志越第三地区において土地区画整理事業が行われた。施行者は第二が市、第三が組合で、地区の東側4分の1ほどが第三地区、残り市街地側が第二地区となる。第三地区は11年1月13日に幸福と命名し2〜4丁目に住居表示を行った(1丁目⇨宅地造成・住居表示未実施)。第二地区は同年11月13日に住居表示を実施して清流1〜8丁目と命名された。

幸福と清流の町名は町内会が独自に決めたという。

第2地区の清流地区は清い流れの千歳川に面していることからの命名か。なお、清流6丁目は10年から11年にかけての静和土地区画整理事業(個人)によった。この地には昭和20年10月に静岡隊が緊急入植している。静和とは静岡衆が協力する意。

地名の幸福は、十勝の幸福が道内初(福井県人が入植した札内周辺の

幸震（難読）↓幸震+福井⇨幸福）、千歳の幸福は住民の幸を望んでか。

### 泉沢向陽台の開発

昭和53（1978）年6月に泉沢の一部が市街化区域に編入され、8月には住宅地が泉沢向陽台と命名された。54年2月20日に若草1〜5丁目、白樺1〜6丁目、里美1〜5丁目と命名された。

59年8月には2期住宅地が市街化区域に編入された。62年3月21日には文京1〜3丁目、柏陽1〜5丁目、福住1〜4丁目と命名されている。

文京は平成2（1990）年に1丁目が民間開発事業者に分譲、2丁目はサイエンスパークとして昭和61（1986）年から分譲が開始された。また、3丁目は高等教育機関誘致の目的が消え失せ、平成7（1995）年4月1日に4〜6丁目（文京ニュータウン）に分割のうえ宅地造成され分譲された。

泉沢向陽台の町名は造成分譲を行った千歳市土地開発公社による命名で住居表示は行われていない（2期住宅地は原案を市民から公募した）。竣工記念誌『泉沢 森の中の新しい都市』には次のように命名の経過がある。

泉沢向陽台 かつて先人達が荒野を拓いて築いたこの街の黎明期を思い、また百年を迎えるに到った千歳市の新しい時代への黎明のときを併せ考えて、明るく伸びゆく街であれ！ 太陽に向かってたくましく花開き続ける向日葵の如くあれ！との希望を託した名前、それが『泉沢向陽台』となったものです。／佐藤文紀氏（千歳市在住）

若草 雑草のように強くたくましい街、緑豊かな町として、住む人も町の名にふさわしくこころ豊かで健康で、のびのび住める町であるよう「若草」と命名されました。

白樺 北の厳しい気候風土に打勝つ強い生命力と白く美しい木肌をもつ「白樺」。しかも、泉沢周辺には最も数多く自生することからこの町の名と

して命名されました（註・当初、銀世界が雄大で北海道のイメージに合致することから「白雪」とされたが、日本酒の銘柄を想起させることから再考となった）。

里美 私たちの住む里がいつまでも美しく自然と調和した町として永遠に栄え発展するように願って「里美」と命名されました。

文京 当初の土地利用計画においては文教施設の誘致と試験・研究機関の集積を核とした開発区域であったことから「文京」と命名されました（執筆者註・文京は「ふみのみやこ」から文教に通じ、地名では直截的ではない「文京」とする例（江別市文京台など）は多い）。

柏陽 泉沢周辺には柏の木が広く見られることと自然と太陽の持つ暖かさとも明るさが調和する街ということで「柏陽」と命名されました。

福住 泉沢周辺は、かつて多くの動物が棲んでいました。この台地は動物たちにとって豊かなところ幸福（しあわせ）の住まうところだったのでしよう。「福住」はそれにちなんで命名されました。

### 蘭越地区の開発

蘭越地区は古くからのアイヌの人々の生活の場であった。また、支笏火山灰台地の千歳川浸食部であったことから山に囲まれ風も弱く、川の北に位置することから日当たりもよかった。しかし、千歳川と北斜面の間のわずかな平地しか宅地に適さないこと、上流に向かうほど宅地に適した平地の幅は狭くなっていくというハンデがあった。シコツの先端である。

桂木 アイヌ語のランコシ（カツラの木・の群生する・所）の和訳。

昭和52（1977）年11月20日に蘭越の市街地側が大和町の一部を取り込んで住居表示を実施し桂木が成立した。1〜6丁目がある。

新星 町の中央部にある新星公園は昭和21年から53年までの間、主にアイヌの子弟が通った蘭越小学校の跡地で「閉校之碑」が建つ。道道支笏湖

公園線を挟んで本来のランコシに蘭越生活館、蘭越保育所がある。

この地において、平成11（1999）年度から19年度を施工期間として蘭越エコタウン土地区画整理事業が行われた。

新星という町名は13年6月30日に1、2丁目で成立、住居表示も同時に実施された。町名をいかにするか住民説明会において、新世紀（H13＝2001＝21世紀）にちなみ、新世↓新星＝星が輝くような美しい町とすることで参加者全員の賛同で決まった（波多野吉夫提案／『「新星」町内会創立10周年記念誌』）。

#### 参考文献

NHK北海道本部『北海道地名誌』北海道教育評論社1975年／長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞1976年／角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 北海道』角川書店1987年／千歳市『千歳市史』1969年、『増補千歳市史』1983年、／千歳市泉郷獅子舞保存会『泉郷獅子舞』1981年／千歳市開拓農業協同組合『砂礫に耕す・千歳開拓四十年の記録』1984年／千歳市土地開発公社『泉沢 森の中の新しい都市竣工記念』1997年／千歳市農業協同組合『千歳市農業協同組合史』1984年／平凡社地域資料センター『日本歴史地名体系第一巻 北海道の地名』平凡社2003年／北海道さけ・ますふ化場友の会『北海道さけ・ますふ化場創設の記録』1984年／『千歳毎日新聞』／『千歳民報』／『北海道新聞』